

言語発達障害研究会第 82 回定例会報告

日時：2019年6月1日（土）13:30～16:30

場所：国立オリンピック記念青少年総合センター センター棟 402 室

内容：「質問－応答関係の評価・支援について」

発表者：東江 浩美（国立障害者リハビリテーションセンター）

知念 洋美（千葉県千葉リハビリテーションセンター）

講演では、質問－応答関係の考え方や、支援の仕方について教材や症例を交えて紹介がありました。質問－応答関係とは、会話や、他者にわかりやすく説明することで、記号形式－指示内容関係、基礎的プロセス、コミュニケーション態度の3側面に関わっており、発達的に習得されるものであると示され、各項目の説明や、得点の分析、通過率について触れられました。また検査で会話面全てのことが捉えられるものではなく、得点やプロフィールだけでは高機能自閉症児の問題を検出することが難しく、質的な特徴の検討が必要とのことでした。質的に分析することにより、現在の段階を把握し、今できるコミュニケーションを広げ、次につながる働きかけや支援について情報を得ることができるとし、例えば、結果から会話ができないという見方をするのではなく、手助けを求めるスキルの育て方を考えるといったことでした。

質問－応答関係の支援では、会話の検査を行う理由として、会話には話をしたい、話を聞いてほしい、自問自答・考えるという機能があること、支援のポイントとして、1.タイム

リーに（旬）、2. 子どもにわかる形で（視覚支援）、3. 楽しむこと（安心・安全）が挙げられました。なぞなぞ課題を例に挙げ、記号形式の段階に応じてプログラムを設定し、働きかけの原則としては、1. 話題は現前→レムナント（旅のしおり等の活動のなごり）→非現前、2. 語彙項目は容易→困難、3. スクリプトはシンプル→複雑といったように段階を設定、習熟度に応じてコンポーネントを追加していき、役割交代等の手法を通じて暮らしの中で活用できるようにしていくとのことでした。また役割交代等を通じて、会話のルールを理解したり、わからないこと、不明な点への質問や共感をする等のコミュニケーション機能を学習する機会にすることも、会話を円滑に進めるためには大切とのことでした。



<参加者の声>

- まだ使ったことがなく、いつか実施したいと思い今回の研修に参加させて頂きました。
その子のレベルをしっかりと評価して、支援を考える必要がある、とあらためて感じました。この教材は、親御さんの説明にも使えると思います。
- 質問－応答関係検査を幼児期の色々な年齢のお子さんにとらせてもらい、質問－応答関係検査の奥深さ・面白さをとても感じていました。お子さんと共有したい、分かち合いたい、その気持ちを出会っている時間ずっと大切にしていきたいと考えました。
- 語いは十分あるのになかなか会話がうまくならない、という方にこの検査をすると、何につまずいているのか、何が苦手なのかわかりやすくて助かります。一方で訓練立案でなかなかバリエーションが増えなかったなので、この機会に他の先生方の教材やすすめ方を知ることができてとても参考になりました。